

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

2000年10月No.120

胎児を守る運動

不毛な成功

ヨーロッパでは水面下で、人口危機の爆発音が鳴り響いている。今後50年間に、ヨーロッパと日本では劇的な人口減少が予想される。ヨーロッパでは一億二千二百万減って六億、日本では二千二百万減って一億五百万まで減ると思われる。世界の33ヶ国で人口減少が予測されると国連が発表した。

さらに高齢化も加わって、労働力不足から年金システムが崩壊し、高齢者の福祉・保険にひずみが生じるだろう。この先、福祉制度は、政府の財源不足により各世代の人々に混乱をもたらしかねない。(国が、学生のためのローンや、高齢者の医療費補助のための予算等も検討すべきではないか?)
先進国での人口減少を国連はどう回復させるつもりか? 途上国の若者を大量に連れてきて、現在の労働力維持をはかる「移民補充」を計画しているらしい。計画書によると、今後50年間に日本は三二〇〇万、ヨーロッパは一億六千二百万という、とてつもない数の移民を受け入れる予定となっている。ここに大きな皮肉が潜んでいる。そもそも、国連がしきりにけしかけた人口抑制、過激なフェミニズ

ム等々の結果、人口減少を生み出したのだから。

問題点はさらに二つある。第一に、出生率が減っているのは先進国に限った事ではない。あちこちの国々で人口がこれまでの水準を下回るようになると、先進国に補充する人員も減ってしまう。つまり、「移民補充」は一時的補修にすぎ

ず、根本的問題解決ではない。

第二に、大量の移民流入によって、どんな社会問題が起こるのだろうという不安である。国連の報告書には、たとえ人口減少や高齢化社会をくい止めるためであっても、多くの国において、より一層多くの移民が深刻な社会的・政治的問題に直面すると思われる」とある。

これら諸々の理由から、人口減少傾向にある各国が、家族の結びつきを深め、出産に前向きになり、出生率を上昇させるのが望ましいと思われる。

あまりに明確すぎて無視できない

国連 来たる人口不足に警鐘

国連機関やその他の人口過剰に関する研究団体が事前に注意したにもかかわらず、世界は深刻な人口不足問題に直面している、と警告した報告書を国連は今週発表した。

国連事務局の人口局は報告書の中で、「補充のための移住」と記しているが、これは多くの先進国は十分な労働者を確保するには大規模な移民を受け入れをしないということである。各国の人口統計や人口予測を追跡している同局は、多くの国が2つの危機的傾向に直面していると指摘した。それは、「人口の減少と高齢化」である。

国連の機関は、多くの国で出生率の低下を招き、人口を補充するのに十分な子どもしか出生しないような政策を採ってきた過去半世紀の各国政府に人口不足の原因があるとしている。

国連の報告書によれば、現在61ヶ国が人口を維持するだけの余力がなく、この数字は今後増え続ける事が予測される。

報告書によると、出生率が低下した結果、各国の全人口に占める高齢者の比率が高くなり、その高齢者を支える労働世代の負担が増し、そしてまた15才から65才の全労働者数も減少傾向にある。

い社会の図式、いったん先進国の仲間入りをしたら、その国の出生率は確実に下がる。いったん、人が一定レベル以上の生活水準を手に入れると、それを保つための情報を鵜呑みにしやすくなる。例えば、(財)家族計画協会が「赤ちゃんはかわいいだけのものではない。おねしょしたりうんちで汚したり、病気になったり、育てるのにとてもお金がかかる」と言った情報などに。(家族計画協会編「思春期の危機」デンバー1974,15)
その結果、家はからっぽ、人口減少の危機が生じる。 スティブン・モヤ

報告書は、「全体の人口減少分を埋め合わせるために必要な移住者よりも、減少した労働者人口を埋め合わせるのに必要な移住者数の方がはるかに多い」と予測している。さらに、「高齢化を補うのに必要な移民の数は非常に多く、どの国をとってみても、過去にあった移住を大幅に上回る数の移民を受け入れざるを得ない状況にある」と指摘している。

多くの国において移民者の大量増加に抵抗を示すことが予測されるため、政府は退職年齢を引き上げるか、退職金や医療給付金の制度を変更するか、また退職した人々に対する労働者の財政支援額を大幅に上昇させるか等の措置を取らざるを得ないであろうと報告書は予測している。

移民が人口統制か

(外国人労働者を歓迎すべきか、それとも家族計画を通じて彼らの排除を試みるべきか?)

移民への対応がアメリカやヨーロッパで変化しつつある。アラブ・グリーンズパンFRB議長が2月に行ったハイテク・ビザ数を増やすという提案は広く受け入れられた。3月には国連の人口局が、「補充としての移民：人口の減少や、高齢化に対する解決策となるか?」という報告書をまとめた。過去においては組合員の生計を脅かす存在として移民を捉えていた労働組合は、今では違法外国人の包括的大赦を要求している。熟練した労働者の不足がより一層深刻になる中、外国人労働者を雇っている雇用主に対する告発は減少しつつある。人口増加の見込みがない地域では、新たに自分たちの町に移民を迎えようと積極的に活動している。

発展途上国における人口減少や減り続ける労働力をくい止めるのに必要と思われる大量の移民枠があるというのに、増え続ける労働力の需要に現在の移民数だけでは足りないという懸念がすでに頭をもたげ始めている。人口が二倍に

なることがもはや無いほど出生率が急速に低下している地域では、これは重大な問題である。

アメリカでは最近移民への需要が急速に高まっているにもかかわらず、メキシコやその他の国では人口抑制計画が引き続き行われている。

これは勿論、人口抑制計画の数ある例外の一つに過ぎない。全米科学アカデミーが一九八六年にまとめた報告書にも記されている通り、急激な人口増加は発展に拍車を駆け、生活水準を引き上げる促進剤になるはずである。しかしながら、人口統制局は人口の増加は悪であるという主張を維持し続けている。人口増加を抑制することにより、USAIDは真の経済発展を促進するというもう一方の目標と正反対のことに従事していることになりかねない。

人口統制局は「人口過剰」は貧困をもたらすと主張する。しかしながら、人口抑制の標的になっている国の多く(特にアフリカ)は間違いなく人口不足である。アフリカ2000ウェブサイト(<http://www.africa2000.com>)では様々な国の人口密度と一人当たりの収入をグラフに表わしてい

人口爆発は本当なのだろうか

前世界銀行総裁のロバート・S・マクナマラ氏は、世界の人口はコントロールできなくなりつつあると一九九二年に述べました。彼は私達が今すぐそれに対する措置を講じるよう主張しました。そうしなければ多分地球環境は破壊され、経済的、社会的発展は数十年分は逆行するだろうと言ったのです。マクナマラ氏は、全ての国に避妊具を供給するために世界銀行が融資を行ない、国民が確実にそれを使用するように政府に努力するように求めました。国

る。イギリスは1平方マイルに六

三四人、一人当たりの収益は196,000ドル。ベルギーは八六六人に26,400ドル。オランダは一九七人に25,940ドル。それとは対照的に、ナイジェリアは1平方マイルに三四六人、そして一人当たりの収益は240ドル。ケニアは二九人に320ドル。そしてタンザニアは九〇人に170ドルである。

もし瀕死のヨーロッパ経済の活性化がアフリカや中東にかかつていたのであれば、そして高齢化に悩むアメリカのコンピュータ産業が繁栄し続けるためにメキシコやアジアの力が必要なのであれば、逆効果を招く様な人口抑制計画は即刻止めるべきである。

ステイブン・モッシャー

民がその計画のもとで許された以上の子どもを産んでいないか、各国の監視を国民人口基金が行ない、もし子どもの数が多すぎればこの計画が遵守されるために次にどのような手段を取るべきかを国連の経済社会理事会が決定することを要求しました。

これは過激なシナリオです。つまり世界政府が誰が子どもを産んでいいか、そしてどのくらい産んでいいかを決め、世界のいたるところで避妊具の使用を義務づけるというものです。ブライバシーが侵害され、子どもを産むか産まないかを選択する権利がこれで終わりになるのです。

マクナマラ氏は人口増加の速度が急激であると主張しましたが、彼はまた私達が数十年間経済的社会的発展を遂げたとも言いました。もし人口の増加がそんなに悪いものであるならどうしてそのような大きな進歩があったのでしょうか。そしてなぜ人口が増加しつづけることが進歩を妨げると確信しているのでしょうか。

世界政府が人口を調節するというマクナマラ氏の考えに追従する前に「王様の衣が本物であるかどうか」(発表されている数が本当かどうか)を見極めなければなりません。

一九九一年ナイジェリアで行なわれた人口調査で重大な問題が持ち上がりました。人口調査の三年前に出されたいくつかの報告書によれば、西アフリカにあるナイジェリアという国は、人口が著しく過密でさらに人口が増加中というものでした。様々な見積もりの結果、ナイジェリアの人口は約一億二

千三百万と推定されました。もう五十年も経てば五倍にふくれあがるだろうと予測されました。

世界銀行はナイジェリアに人口調節計画を実行するよう圧力をかけました。計画出産をするために中絶の合法化が求められました。

そして一九九一年十一月、ナイジェリア政府はこれまで二十年で初めての正確な人口調査を行いました。国境は三日間閉鎖されました。仕事場も、商店も、学校も閉鎖されました。全ての人が三日間家から出ないように申し渡されました。それから、人口調査員がナイジェリアの隅々まで出かけていきました。一九九二年三月、数の集計が完了し、ナイジェリア政府は集計が正確であると確信していました。

ところで、ナイジェリアにどのくらいの人々が住んでいることが判明したのでしょうか。それは一億二千三百万人でもなく、一億二千二百万人でもなく、一億人でもなくまして九千万人でもありませんでした。公式発表された総人口は八千八百五十万人だったのです。前回の推定最少人口は27%も実際より多かったのです。

アメリカの人口調査局はそのとき推定世界人口も数値が高すぎるかもしれないとコメントしました。本当に世界中に五十億人もいるのでしょうか。それは誰にも分からないことなのです。というのは誰も正確に数えた人はいないので。そして、たとえ、世界に五十億人いるとしても、そのことは悪いことなのでしょうか。

聖書は私達に困っている人に分け与えるように教えています。子どもを産めないようにしてはいけない、ピルを与えてはいけない、子どもを中絶してはいけないと教えているのです。

『人口爆発』説を打破する

大きな街に出ると、人間の集団、混雑、ホームレス、スラム街、公害、交通渋滞などをよく目にします。このような現実に出会うと、世界は確かに人口過剰であると思えてしまいます。世界の人口が初めて十億人を超えるのに、人類創造に始まり一八三〇年までかかりました。ちょうどその一世紀後、一九三〇年には世界の人口は二億の二十億人に達し、それから六十年（一九八七年）も経たないうちに五十億人に迫りました。現在、世界の人口は大体四日か五日ごとに百万人増加しています。この急激な成長は人々を不安にさせ、あたかも「人口爆発」が現実起こるのだという確信を持たせてしまいます。しかしながら、一部の人が予想しているこの「大洪水」は実際には起こらないかも知れません。最近の研究によると、21世紀の末期でも世界の総人口は白億人程度に落ち着くだろうと予測されています。人口抑制が必要だと強く主張する人たちがさえも今ではこのことに同意していません。

人口問題はキリスト教徒のほうにより興味を示す話題です。創世の書 一：28では「生めよ殖えよ地を満たせよ」と神が命令しています。さらに、創世の書 九：1で

も、大洪水の後に神は再び同じことをノアに言っています。しかし、ふと疑問が生じてきます。生み、殖やし、地球を満たすのに上限はないのでしょうか？

「人口論争」

メリーランド大学の経営学の教授であるジュリアン・L・サイモン氏が次のようなことを述べています。「18世紀までは、人口の増加は緩やかで、健康の増進や死亡率の低下はほとんどありませんでした。また、自然資源の有効利用もあまり進まず（かと言って大きく不足していたわけではない）、その恩恵は環境に大きな影響を及ぼしませんでした」。サイモン教授はさらに、「それ以降は、死亡率のめざましい減少と資源の急激な開発によって人口が急激に増えてゆきました。さらに、世界が富み、各地で先例のない衛生的で美しい生活環境が広がりました。それに、貧しい国や社会主義国家はその地位を下げてゆきました」と言っています。サイモン教授は、「より多くの人間とより多くの富が、より多くの資源（少なくともなく）と衛生的な環境に結びついたのである」と、マルサス主義に反する結論付けをしています。これに反して、人口抑制主義者

たちは「資源を増やすために人口を減らすべきである」と主張しています。もしその通りであるならば、例えばポリビア（人口六百五十万人、その領土は日本と韓国を合わせたほどの大きさで、豊富な自然資源を所有している国）は富んだ国家であるはずですが、残念ながら現実にはそうではありません。

「人口過剰なのは一部の街であり、国全体ではない」

土地面積の単純な計算によると、現在地球上にいる約五十億の人間はテキサス州に全て収まると言われています。それも各家族に小さな庭付きの家を与えてです。このように、面積が問題なのではないのです。特定の都市に人口が集中してしまうことが問題なのです。そしてそれは、田舎に様々な好機が欠けていることが原因で起こるのです。発展途上国で多く見られる都市への移住は、それ以外のほとんどの地方を住みにくくしてしまいました。これに対し、都市では基本的な社会設備や健康保険、食糧供給、教育、交通、汚物処理、住宅などの様々な厳しい問題に直面しています。この一例としてエジプトがあげられます。エジプトでは人口の98%（六千万人）がナイル川の川沿いにあるいくつかの都市に集中しています。

そして、その面積はエジプトの全領土のわずか5%を占めるだけなのです。この急激な移住現象は、ロバート・シフアーによって「ラスベガス効果」と言われるようになりました。これは、移住者を「オッズが悪くなるのがわかっているのに、それでもいつか大当たりが来るのではないか」と思いながら、大きなカジノや大きな宝くじ売場に群がる「ギャンブラー」に見立てて言われたものです。現在、人口が九百万人以上の都市が全世界で少なくとも25はあります（そのうちの第一位はメキシコ・シティーの二千五百八十万）。

「人口と開発に関する国際会議」

国連主催の人口と開発に関する国際会議（ICPD: International Conference on Population and Development）が一九九四年に人口千百万人のカイロ市で開催されました。この会議は、その名の通り人口と開発について議論が集中されるはずでしたが、しかし、「人口抑制あるいは減少させることが、経済と社会の発展にいかに関与するか」について議論するのに大部分の時間が費やされました。このような状況は、貧困を無くすのではなく、代わりに貧しい人々を無くすことがより簡単でより安価でより便利であるという誤った考えをばびらせてしま

います。ICPDの立てた目標は、二千十六年の世界人口を27億人に抑えることで、そのために百七十億ドルの投資を予測しています。

「減少・高齢化する人口」

発展途上国とは異なり、ヨーロッパのほとんどの国々、アメリカ合衆国、そして日本では人口が減少しています。これらの国々の人口統計上の比率は補充レベルを下回っており、これはこれらの国々の人口が高齢化してきているということを表しています。これらの国々では、中絶の数も多く、一家庭あたりの子ども数は減少しています。もしこの出生率の低さが続いた場合、これらの国は人口の減少を外からの移住者によって埋め合わせざるを得なくなり、ICPDでは、「家族を再構成するための基本的権利」についての熱い議論が交わされました。これは移住者を家族の一員として迎えようとするものです。これに対し、先進国では、南での人口抑制のために何十億ドルも投資する計画を熱心に立てています。どのような場合においても人間の数が問題でないことは明らかです。また、この惑星には様々な資源が豊富にあります。この豊富な資源を掘り出し、全人類の利益になるように人間は創造性を試され、労働力を求められるのです。

他人を犠牲にした新しい命

先週の「ナショナル・ポスト」誌の論評の中で、ジェフ・ホワイトはびつこで病気がちの若者を排除するに等しいような「新しい倫理的価値観」を弁護した。私はホワイト氏の論評を車椅子に乗ったまま読み、彼の「新しい倫理」が私のような人間に対してどんな敵意をもつようになるのかと考えると身震いした。

今年初め、ドイツとアメリカの研究者たちが衰弱する病を予防するために胚の幹細胞を動物に使用したらしい。その研究者たちはこの発見を、パーキンソン病や多発性硬化症などの病気を治療の「重大な進歩」であると位置づけた。科学者たちの中には、幹細胞研究が、アルツハイマーや糖尿病、発作、脊髄の損傷や骨の病気などに対する可能性を秘めていると考える人たちもいる。

先月、スウェーデンの研究チームが「ネイチャー・ニューロサイエンス」誌に、妊娠中絶を受けた人からとった細胞が、パーキンソン病の症状を軽減する力をもっていることを発表している。約50件の移植が、多発性硬化症の患者に行われているそうである。

この推論的研究と実験的治療法が騒がれる中、カナダの医療・倫理・法律マックギル・センターの創設者であるマーガレット・ソマーヴィル博士は、道徳及び倫理問題が語られるようになるまでは、胚の幹細胞研究は中断するべきだと語った。

本気だろうか？私は慢性の退行性多発性硬化症と骨粗鬆症を患っている。私は幹細胞研究の恩恵を受けられるかもしれないのに！何年もの間、私は自分の次の住所が療養所になってしまおうのではないかとという恐怖を抱いて生きてきた。そして自分が車椅子に頼ったかわいそうな人間の一人になってしまおうのではないかと、という思いに取り付かれてきた。そして誰かたずねてきてくれたのかと療養所の窓の外をただ眺めているだけという単調な日々を送ることになるのではないかと悩みつづけている。夜中にそのような将来を思い恐れていると、その思いから逃れられる眠りにつけるまでいつも苦しめられる。

私は、自分の体を崩壊させようとする病を和らげてくれたり遠ざけてくれる前途有望な発明の嵐に目をくらまされている。身体

障害者が移動するのに必要とする妙な機械に頼ることなく自力で歩くことができたり、あのにくいMS疲労から解放されることを考えると嬉しくてたまらなくなると。想像してみよう！妻と踊ったり、脇で座ってみているだけでなく子どもたちと一緒にスキーができるとしたら。夢がかなうのだ！私はただ、他人のいのちの代償として解放を得たという現実から目を背ければいいだけである。

それはステイブン・キングの小説のようだということを利用して私に気がつくべきだった。多発性硬化症による骨折や悪化の危険から解放されるには、必要とされていない他人のいのちに頼ることになる。私が病気からの自由を得るためには、他人のいのち、存在そして世界での居場所を奪うことによる結果を受け入れ、さらにみじめな気持ちにならなければいけない。だめだ！そのような治療は苦しみを増加させるだけである。

道徳上とても大切なものは、全ての人のいのちが等しく道徳的価値をもっていることである。科学の世界においては過去何十年にもわたって、人間のいのちが受精の時点で始まることと語られてきた。これは好みや意見によって異なる問題ではな

い。これは明らかな科学的事実である。

幼いころから、私は真実を求めそれに従って生きることを教わってきた。真実とは気まぐれなものなのだろうか？道徳とは変わりやすいものなのだろうか？倫理は状況によって変わるものなのだろうか？個人的に何かを得るために、一貫性や主義そして多くの人が言う「自明の真理」を投げ捨てるべきなのだろうか？！とんでもない。

悲しいことだが、私は必要とされていないのちを利用してとつとするような治療法から目を背けなければならぬ。失った機能をよみがえらせて人間性を失うよりも、半分しか機能しない身体のままにいる方がましである。私の不幸にはきつとそれなりの意味があるはず。

私は完全に自分だけに頼っている孤島ではない。私の決断は自分のことだけを考えたものであつてはいけない。決断を下すときには、他人や社会、さらには子孫をほめかすものについて起こりうる結末をきちんと考慮しなければならぬ。自立は神話である。

独立している人などだれもいない。すべての人間は、「人間家族」の一員として互いに頼りあつてい

他人に影響を与えることになり。この点を見落としてはいけない。私は中絶された胚からとられた幹細胞を使った治療をはねつけなければならぬ。

一つ良い点としては、成人の幹細胞が薬と一緒に使うことによって、外部の物質に対する免疫反応を覆い隠すことができるということである。にもかかわらず、患者からの幹細胞は、免疫不適合の問題を考慮したものはいえない。

米国立ヘルス学会で以前生化学者兼生物学者であったダイアン・アーヴィング博士は、成人の幹細胞が要求される細胞のタイプに「おだてられる」ことがあると述べている。アーヴィング博士はさらに、「成人の幹細胞はすでに患者が必要とする細胞に近いものだから、人間の胚の幹細胞を使う必要などまったくなく」と強調する。博士は、自身の論点を裏づける多くの医学論文記事を引用している。

本当だろうか？もしかしたら自分に当てはまるものがあるかもしれない。良心の呵責にさいなまれることなく失った機能を取り戻せるなんて。妻と踊ったり、杖をつかず娘の結婚式と一緒にパーズン・ロードを歩いたり、安心して夜眠れることを想像してみよう。

マーク・ピックアップ

自然に死なせるのと故意に死なせるのは大違い

人を自然にまかせて死なせる事と、故意に死なせる事は、同じではない。言い換えれば、人から生命維持装置を外す事と、死なせる為に人に薬を投与するのは同じ事ではない。この違いを人々がちゃんと理解してくれたら、と私は心から願う。人を人工的に生かしている機械を患者から外すのは、殺人ではない。機械のコンセントを抜くという事は、ただ、後は自然に任せるという事なのだから。

反対に、致死量の薬を患者に注射するのは、例えそれがその患者の望みだったとしても殺人である。

ちょっと考えればわかることなのに、多くの人々がジャック・ケボークアンをヒーローとして歓迎し、又別の所では友人の生命維持装置を外した男性を殺人者と間違った認識で呼んでいる。人々は混乱している。

ケビン・ハウエルとジェイムス・スコットは将来の約束をした。もしどちらか一人が生命維持装置で生き長らえる事になったら、もう一人はそのコンセントを抜くという約束である。南

カリフォルニア警察によると、ハウエルは先週、20年来の友人スコットが癌で死を待つばかりになっていたサン・ベルナーデノの病院で彼の人工呼吸器を外し、二人の約束を履行した。スコットはその数分後に死亡した。そしてハウエルは殺人罪の嫌疑を受けている。

スコットの母親エマ・オーウエンズは、「二人の約束は知っていました。誰もが知っていたのです。でも、本当に実行するなんて考えてもみませんでした。」と言った。

「私達は家族として彼を逝かせる決断をしていました。私達のやりたいように。あの男にこんなことをする権利はありません。あの人は息子を殺したのです。」この悲しんでいる母親の発言について何が興味深いことかという、彼女の論理で言つと、どちらにしろ彼女も後で息子の殺人を計画していたという。家族の人達は、「静かな」死を迎えられるようにと、投薬を変更して

れるよう医師に願おうと決めていた。医師の家族への説明によると、ある薬を与えるとスコットの

トの血圧が低下し、最終的にはまるで眠っている間に死ぬように出来るといふ。

私に言わせればそれは死なせる方法としては生命維持装置を外すよりも問題である。家族はまさにその一歩を踏み出そうとしていたが、ハウエルが病院に来るまで待つことにした。そして彼が代わりにその一歩を踏み出して、後は自然に任せた。

確かにハウエルが家族に、家族のやりたいようにさせなかつたのは間違っていた。しかし彼がした事は殺人ではない。ジャック・ケボークアン医師が9年間に一三〇人を次から次へと殺し続けられたのは、それはすべて、自然に死なせる事と故意に死なせる事のの違いについての人々の意識があいまいだったからである。ありがたいことに、去る4月13日、この凶悪な病理学者はALSを使っての殺人の罪で、10年から25年のミンガン刑務所での服役を言い渡された。

ケボークアンのした事は、多くの人々が信じているような、耐え難い苦痛に苦しむ治る見込みのない病人の自殺の援助をしたとい

うのではない。むしろ彼は、治る見込みのない病人ではなく、多くの場合ただ軽いうつにかかっていただけの大勢の人の死ぬ援助をしていた。

彼の「患者」の多くは40歳以下で、何の病気にもかかっていなかった。ある時など、来院してからまだ一時間も経っていない女性の死ぬ援助をしたのである。その女性はいのちに関わる病気だったわけではなく、落ち込んでいただけだった。

もしケボークアンが有罪を宣告されなかつたら、更に多くの健康な人が死ぬことになっていた事は明白で、また安楽死がもつと多くの州で合法化されることになっただろう。

そうなつたらここカナダでも恐ろしいことになる。カナダはアメリカを真似する傾向にあるからである。何故恐ろしいかといえば、合法化された安楽死のもたらすものは、ほとんど悪いことばかりだからである。

一九八一年から安楽死が本質的に合法化されているオランダでは、お年寄りや障害者が社会の重荷である、という態度が強

い。一九九〇年にオランダ患者協会は、もし病院に運び込まれた場合、「いのちを終わらせる目的の治療はしないで下さい」と意思表示が出来るように、そう書かれた財布に入る大きさのカードを作る必要性を感じた。

一九九一年政府による安楽死に関する初めての調査が発表された。このレミング報告(この調査を率いるオランダ高等評議会の法務長官J・レミング博士からとつた名前)は、不安を感じさせる事実を明かしている。それによると一九九〇年には、一〇四〇人が不本意な安楽死で亡くなっている。それは、本人の意思の確認を取らずに、医師が進んでこれだけの患者を殺したということである。患者の14%には生きる力が十分あったし、72%の患者はこれまで一度も自分のいのちを終わらせて欲しいと意思表示した事はなかつた。

「死ぬ権利」を唱える人達は、しばしば安楽死は「選択肢」であると主張する。しかしオランダの経験から見てもわかるように、自発的な安楽死や自殺援助の実施が認められたら、かなりの数の患者達が、結局何の選択肢も持たないまま死んでしまう事になるであろう。

リシア・コルベラ



中絶戦争で勝利を収める

「女権拡大と非暴力研究協会」が、「中絶戦争で勝利を収める」という新刊本をインターネット上で発表しています。それは、<http://www.fnsa.org/apaw/>のアドレスで利用することができます。

ロウ対ウエイド裁判のことが風化しつつあり、中絶産業が崩壊しつつあるという兆しは今では極めて明白なものとなっております。政治だけに目を向ければ、なぜこのようなことが起きていて、将来どのようなことが起きるかよくわからないでしょう。

「中絶戦争」という表現は、激しく繰り広げられている論争について語る比喩的な方法としてではなく、実際行なわれていることを文字どおりに表現する方法として用いられているのです。もし、中絶は人間を殺すことを意味するという中絶反対の人々の主張が正しければ、中絶を実行する人々は当然、戦争で人間を殺す兵士と同じように、自らの仕事に当たっているはずで

このことの証拠が何かあるでしょうか。そしてもしあるなら、そのことがどのように今起きていることを理解する手助けとなっているでしょうか。そしてやがてどのようなことが起きるでしょうか。

この本は、中絶を行なっている人々の実際の経験に目を当て、中絶産業はあまりにももろく長続きするものではないと結論づけています。それは、中絶を行なう心理と、その後続く社会的な力学にまず目を当てたものです。

このことには、中絶を行なう人自身の、その仕事の原因のトラウマ（精神的外傷）に関する証言が含まれています。それにはまた、矛盾する考えから生じる精神的な緊張状態も含まれています。そのような人々が必要としている情緒的なサポートを与えるために利用できるはずのさまざまなグループ、つまり同僚や、中絶賛成運動も自分たちの顧客も、十分に役に立たないことがわかっています。

その本は次のような予言の正しさを主張しています。それは、中絶産業は弱体化しつつあり、その傾向を止めることはできないということです。（プロ・ライフ・ニュース）

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィアAceエース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS).....15000 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え).....2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) 赤ちゃん: 最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) 経口避妊薬: ピル.....100 + 郵送料
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

ノルウエー 安楽死有罪判決を支持

(プロ・ライフ・ニュース)

最高裁は、同国の安楽死法をめぐる重要な試験訴訟のなかで、安楽死を初めて試みたノルウエー人医師に対する殺人有罪判決を支持した。

すでに現役を退いた82才の医師クリスチャン・サンズデイレンは、一九九六年六月、多発性硬化症に冒されていた当時45歳のポデル・ビョークマンに懇願され、致死量のモルヒネを投与した。その後、彼は自らを殺人容疑で審理するよう求めてきた。

彼は最高裁に至るまで、幾度か控訴を繰り返し、法廷での闘争を経た後、第一級殺人罪で有罪を宣告された。ノルウエーにおける第

一級殺人罪は、最高で21年の刑に服することになる。

満場一致で判決を下した最高裁は、いかなる理由があるうともノルウエーでは安楽死は違法であるという事を確固たるものにするのが極めて重要であったと述べた。

それまでの裁判の中で、女性は瀕死の状態にありひどく苦しんでいた為、サンズデイレンは正しい事をしたと信じている点に言及していた。しかし裁判所は、一九八五年にすでに医師業から引退していたサンズデイレンは、より強力な鎮痛剤を処方するなど他の方法をとるべきであったと述べた。

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬：ピル

注文： 1 - - - - 5 1部 = ￥100
 6 - - - - 20 1部 = ￥75
フルカラー 21 - - - 999 1部 = ￥50
 1000 - - 以上 1部 = ￥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

パンフレット申し込は・・・

1 ~ ~ 5 1部 = 35円
 6 ~ ~ 100 1部 = 25円
 101 ~ ~ 500 1部 = 20円
 500 ~ ~ 以上 1部 = 15円

組み合わせ自由です

十代の性

(5)

質問：ある先生が授業中、「貞潔」という言葉を使いました。僕にとって初めて耳にする言葉でした。一体どういう意味なのでしょう？

答え：貞潔とは行為・思い・発言すべてにおける性的自制を言います。未婚の人が誰かに愛情を示す時は節度をわきまえ、思い・発言・行

為において性的興奮を誘うような態度を避け、既婚の人は配偶者のみと性交渉をもち、ふたりの間に他者が入り込むのを防ぎましょう。

結婚前のセックス、十代での妊娠、中絶、レイプ等の問題のほとんどは、若者が自分の欲望をおさえ自己制御できない事が原因です。セックスは楽しむためにあり、自制など必要ないと思っている人が本当に多いのが現実です。セックスは快樂だけが目的でしょうか？

答は明らかにNOです。もし快樂のみが目的とすれば、いつだって出来るのですよ。けれども文明社会では人間と動物、成人と未成年の性交渉は人間の尊厳を損なう恥ずべき行為として非難されます。

ではセックスの真の目的は何でしょうか？もちろん、夫婦間の性行為で、その結果次の二つが考えられます。

一、赤ちゃんができる可能性。

二、お互いへの愛情と信頼が育まれる。

セックスは新しい生命をつみ、夫婦間の愛を深める美しい行為、そして結婚生活の中で一組の男女が互いを完全に与え合う行為です。愛する人から大切な宝物を与えられ、それをいつくしみ尊重しながら。貞潔とはつまり、素晴らしいセックスを結婚生活のみにおいて実践することです。だから、それ以外のいかなる方法にセックスを用いようとしてもいけません。貞潔な人は、セックスを単に快樂を満たすだけの行為に低めるような事を考えたり言ったりしないよう常に心掛けるべきです。

Q&A